

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年10月9日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520159

研究課題名（和文）20世紀イギリスにおけるモダン・タイポグラフィの形成過程に関する研究

研究課題名（英文）Formative Process of Modern Typography in the 20th Century England

研究代表者

山本 政幸（YAMAMOTO MASAYUKI）

多摩美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：80304145

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、20世紀イギリスにおける近代的なグラフィックデザインの形成プロセスの一端を、タイポグラフィの視点から明らかにすることである。とくに1920年代後半から30年代にかけて流行した幾何学的な構造をもつ新しいサンセリフ体活字の設計手法に注目し、イギリスでこの活字書体を発展させたエドワード・ジョンストン（Edward Johnston, 1872-1944）とエリック・ギル（Eric Gill, 1882-1940）の制作活動を把握し、背後にあった造形思想の実態を探った。両者が継承したアーツ&クラフツ運動の精神性が、機械化と大量生産に対応してゆく独自のデザイン観に至る経過をたどり、イギリスにおけるモダン・タイポグラフィの発達に貢献したことを確認した。

研究成果の概要（英文）：

This study describes a formative process of modern British graphic design in the twentieth century from the viewpoint of typography. It focuses on the letterforms of geometric sanserif typefaces, and traces the design philosophy of Edward Johnston (1872-1944) and Eric Gill (1882-1940). It concludes that their designing way contributed to the development of modern typography in Britain by their new design philosophy for mass production and industrialization though they maintained the belief of arts & crafts movement in relation to the ancient Roman alphabet.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成21年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成22年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成23年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：タイポグラフィ・グラフィックデザイン

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、「モダニズム期の印刷メディアとグラフィックデザインの越境に関する国際比較研究」（2006年度～2008年度、研究分担者）で、1930年代を中心としたモダニズム期におけるグラフィックデザインの越境・国際化の過程を、タイポグラフィを事例に考察した。とくにこの時期、モダン・サンセリフと呼ばれる幾何学的な構造をもった活字書体が西欧各国で実用化され、モダニズム期を象徴する印刷表現に貢献したこと、そしてその中心地であったドイツのデザイナーがイギリスとの交流を深める過程をたどり、両国における印刷物のデザインの影響関係を探った。とくにアーツ&クラフツ運動の盛んだったイギリスの場合、とりわけ大きな成果をあげた印刷芸術において、伝統継承の立場から近代化をいかに達成したのか、さらなる追求が必要となった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀イギリスにおける近代的なグラフィックデザインの形成過程を、タイポグラフィの視点から明らかにすることである。手工芸を重視した職人や芸術家が産業化社会の到来に際していかにその表現を変えたか（伝統の継承と機械化への対応）、大陸から取り入れられた近代的なデザイン思想がどのようにイギリスに影響したのか（大陸のデザイン思想の受容）、その結果生み出された新しい書体デザインの特徴はどうであったか（新書体の設計方法と特徴）を探る。

3. 研究の方法

英国内外のタイポグラフィの動向を踏まえ、20世紀イギリスを代表するカリグラファであったエドワード・ジョンストン（Edward Johnston, 1872-1944）とその弟子で彫刻家・版画家・書体デザイナーでもあったエリック・ギル（Eric Gill, 1882-1940）の活動を中心に一次資料の調査を行う。とくにジョンストンがロンドン交通局の依頼を受けてデザインした地下鉄書体と、イギリスの活字製造・自動鋳植機製作会社のためにギルがデザインした新書体Gill Sansの設計思想を明らかにするため、二人が残したカリグラフィや碑文彫刻といった伝統的な手法による作品との対比を試み、デザインの共通点と違いに着目しつつ特徴を明らかにする。

資料調査を実施する英米の博物館・図書館は次のとおり。

- ・交通博物館（ロンドン）…ジョンストンのデザインしたロンドン地下鉄専用書体に関する現物資料（木製活字、表示・駅名サイン、各種広報印刷物など）を所蔵。
- ・セントブライド図書館（ロンドン）…活版印刷に関する専門図書館。ギルが石碑のためにデザインした手描き文字のドローイング等5,000点に及ぶ巨大コレクションを所蔵。
- ・ヴィクトリア&アルバート博物館（ロンドン）…交通局のためにジョンストンが描いた書体の図面や私家版印刷で使用されたギルの版画コレクションを所蔵。
- ・ディッチリング博物館（ディッチリング）…ギルが工房を開いた小村の美術館にカリグラフィとレタリングに関する一次資料を所蔵。

4. 研究成果

(1) 20世紀イギリスにおける近代的なタイポグラフィの形成過程を、次のような三つの観点から整理した（概略）。

①伝統の継承と産業化への対応

1920年代に刊行された専門誌『フルーロン』（全7巻、1923～30年）は、印刷・活字に関する多数の論考を収録した私家版印刷で、伝統的タイポグラフィの高水準を象徴した。同誌の編集を務めたO・サイモン（第1巻～第4巻）やS・モリソン（第5巻～第7巻）は「新伝統主義」と呼ばれる理論家でもあり、大陸のモダニストたちとの距離をとりつつ、タイポグラフィ本来の使命である書籍印刷を尊重した。その目的は、単に古い様式を保持することだけではなく、伝統技法を継承しながら機械化を受け入れ、同時代の実用と美意識に合った、現代のタイポグラフィを追究することにあった。

19世紀末に自動活字鋳植機の開発に成功していたランストン・モノタイプ社は1923年にモリソンをアドバイザーとして招き、以後30年代までGaramondやBaskervilleといった過去の優れた活字の復刻をシリーズ化する。この間、モリソンは古典活字の美しさを維持したまま新聞印刷に必要な可読性を備え、かつ高速輪転にも耐えうる現代のローマン体活字としてTimes New Roman（1932年）をデザイン、他方で新しいサンセリフ体活字の開

発に向けて彫刻家E・ギルの手腕を見出だす。活字として完成したGill Sans (1928年)は鉄道会社L.N.E.R.に採用されるなど、近代産業に受け入れられていった。

②大陸のデザイン思想の受容

ドイツを中心にいわゆる「ニュー・タイポグラフィ」運動を唱導したJ・チヒョルトは、『コマーシャルアート』誌(1930年)や『サークル』誌(1937年)においてイギリスにその理論を紹介するとともに、ランド・ハンフリーズ社(1935~38年)やペンギン・ブックス社(1947~49年)での展示や仕事を通じて、理論と実践の両面から新しい組版理論を説いた。他方で古典活字の傑作Albertus(1932年)をデザインしたB・ヴォルフはフェイバー&フェイバー社のディレクターに、H・シュモラーはロンドンのカーウエン・プレスを経てペンギン社のチヒョルトの後任となるなど、ドイツのデザイナーが重要な役割を果たしつつ、イギリス独自の近代的なタイポグラフィの潮流が形成された。

③新書体の設計方法と特徴

ギルの設計した新しいサンセリフ体活字は、ジョンストンが主導で設計した地下鉄書体に倣い、古典的な文字のプロポーシオンを尊重しつつも合理的な複製のために幾何学的アプローチをとり、伝統美との融和と用途の拡大を成し遂げた。職人による手仕事を重視し、ひとつひとつの作品の創出を神への奉仕と見なしたギルにとって、合理化された大量生産の工程は不本意に違いなかったが、それでも古代の美を20世紀の書体に託すことに成功した。

(2) ジョンストンとギルによる近代的なサンセリフ体活字の誕生に至るまでの膨大な碑文彫刻のドローイングなど関連する一次資料を国内外から収集、加えて版画、書籍、書体見本帳を含む約200点を構成し、日本で初めてとなる展覧会を開催した。

展覧会名を「エリック・ギルのタイポグラフィー文字の芸術」とし、同年12月17日から平成24年1月29日までの期間、多摩美術大学美術館にて開催した。関連事業として、国内外の研究者を招いて講演会・シンポジウムを開催するとともに、撮影した資料をもとに、図録・論文集を発行した。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 山本 政幸、エリック・ギルのサンセリフ体活字、エリック・ギルのタイポグラフィー文字の芸術、多摩美術大学美術館、査読無、2012年、4-9頁
- ② 山本 政幸、欧文タイポグラフィにおける読みやすさの客観的評価、デザイン学会研究特集号ータイポグラフィ研究の現在、日本デザイン学会、査読無、第66号、2010年、68-73頁
- ③ 山本 政幸、20世紀ポスターコレクションのアーカイブ作成・公開に関する研究(2)、多摩美術大学研究紀要、多摩美術大学、査読無、24号、2010年、171-176頁

〔学会発表〕(計4件)

- ①山本 政幸、ダグラス・C・マクマートリーによるモダン・タイポグラフィのアメリカへの導入、日本デザイン学会第58回春季研究発表大会、2011年6月25日、千葉工業大学
- ②山本 政幸、20世紀イギリスにおけるモダン・タイポグラフィの形成過程、第52回意匠学会研究発表大会、2010年7月31日、関東学院大学
- ③山本 政幸、アメリカ活字鑄造会社の設立とゴシック体活字の発達、日本デザイン学会第56回春季研究発表大会、2009年6月27日、名古屋市立大学
- ④Masayuki Yamamoto, Legibility Research on Japanese Typography, ATypI, 28th Oct. 2009, Mexico City

〔図書〕(計1件)

- ①山本 政幸ほか、エリック・ギルのタイポグラフィー文字の芸術、多摩美術大学美術館、2012年、96頁

〔その他〕(計6件)

- ①山本 政幸、エリック・ギルのサンセリフ体活字、エリック・ギルのタイポグラフィー文字の芸術展講演会、2012年1月21日、多摩美術大学美術館
- ②ルース・クリブ、エリック・ギル1882-1940、エリック・ギルのタイポグラフィー文字の芸術展講演会、2012年1月21日、多摩美術大学美術館
- ③指 明博、エリック・ギルのカトリック信仰と私家版運動、エリック・ギルのタイポグラフィー文字の芸術展講演会、2012年1月21日、多摩美術大学美術館
- ④山本 政幸、モホイ＝ナジのタイポグラフィーコミュニケーションの発見、モホイ＝ナジ・イン・モーション展、2011年10月15日、DIC川村記念美術館
- ⑤山本 政幸、19世紀末プライベート・プレス運動—造本設計と活字意匠にみる美の理想—、フェリス女学院創立140周年記念英文学科シンポジウム「1870—ヴィクトリア朝文芸と社会改良」芸術の部（招待講演）、2010年12月4日、フェリス女学院大学

- ⑥山本 政幸、モダン・サンセリフ活字書体の発達、日本デザイン学会タイポグラフィ研究部会九州研究会、2009年12月12日、九州産業大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 政幸 (YAMAMOTO MASAYUKI)
多摩美術大学・美術学部・准教授
研究者番号：80304145

(2) 研究協力者

ジェームズ・モズリー (JAMES MOSLEY)
レディング大学客員教授

ルース・クリブ (RUTH CRIBB)
ヴィクトリア&アルバート博物館

指 昭博 (SASHI AKIHIRO)
神戸市外国語大学・外国語学部・教授

後藤 吉郎 (GOTO YOSHIRO)
武蔵野美術大学・造形学部・教授

吉田 公子 (YOSHIDA KIMIKO)
多摩美術大学美術館・学芸員